

る)』『季刊民族学』36(3), pp. 87–107.

トーマス・トゥリノ 2015 『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ——歌い踊ることをめぐる政治』水声社。
米山知子 2011 『回るアレヴィー——トルコの都市における場とパフォーマンスの人類学』スタイルノート。

(米山 知子 大阪人間科学大学人間科学部准教授)

山本直輝『スーフィズムとは何か——イスラーム神秘主義の修行道(集英社新書)』集英社 2023年 222頁

本書は、スーフィズム(イスラーム神秘主義)の修行に焦点を当てて書かれた本格的な概説書である。これまでも出版されたスーフィズムの概説書のうち、新書サイズで読めるものを列挙するならば、井筒俊彦の『イスラーム哲学の原像』(1980年)、R・A・ニコルソン(中村廣治郎訳)『イスラームの神秘主義』(1996年)、また中村廣治郎の『イスラーム教入門』(1998年)などがよく読まれてきた。本書は、それまでの思想を重視したイスラーム神秘主義の入門書に比べると、比較文化的な視座を有し、具体的な修行方法や日常生活レベルから説明しているという点で、差異化が図られている。

世界を代表する日本のポップカルチャーにマンガがある。マンガについては、手塚治虫に憧れ、漫画家になりたかったという団塊世代の話を聞く。それほど、戦後日本では親しまれており、日本人の生活に馴染みがある。本書は、日本国内外に数多の読者を持ち、これまで多くの名作を送り出してきた『少年ジャンプ』を刊行する集英社から出版されたスーフィズム入門書だからだろうか。あるいは、筆者がマンガ愛読者であるからだろうか。本書では、『少年ジャンプ』に連載された『NARUTO -ナルト-』が、しばしば譬えとして引用されており、複数のマンガが言及されている。イスラームやスーフィズムには知識がないが、マンガの『NARUTO』を読んだことがあるという日本人読者の理解を促す装置として、マンガを取り入れた点に、本書の斬新さと革新さがある。

さて、本書は以下の13章から構成されている。

序章 イスラーム神秘主義とは何か？

第一章 学問としてのスーフィズム

第二章 師匠と弟子——スーフィズムの学びのネットワーク——

第三章 西欧とスーフィー——中東を越えるスーフィズムのネットワーク——

第四章 スーフィズムの修行(1)——心の聖——

第五章 スーフィズムの修行(2)——心を練り上げる祈禱——

第六章 心の境地(1)

第七章 心の境地(2)

第八章 修行者の心構え——ナクシュバンディー教団「十一の言葉」——

第九章 五功の心——神・自然・人をつなぐ修行——

第十章 心を味わう——修行者の食卓——

第十一章 武の心——スーフィズムとマーシャル・アーツ——

第十二章 心の詩、心の音色、詩と音楽

第十三章 人の心——絶望と希望——

本書の書評として、評者の印象に残った三点について取り上げることにしたい。

一つ目として、本書は、スーフィズムをマンガを通して日本人読者に翻訳しようとした意欲作である。その背景として、現在、著者はマルマラ大学で教鞭を取っており、その意味で日本文化について尋ねられる機会があることが挙げられる。また、世界の人々にも親しまれている日本文化として、茶道、書道、さらに武道などの日本の精神性を代表する伝統文化がある。筆者が最も接点のあるのはトルコ人学生であろう。マンガやアニメなどのポップ・カルチャーと比較しながら日本文化を説明してきた筆者の経験が、本書の随所に

散りばめられている。言い換えれば、筆者は、イスラームという「異文化」を日本人読者に親しみのある文化を用いて翻訳を試みているとも言えよう。

例えば、スーフィズムに馴染みのあるトルコ人にとって、「導師」を意味する「ホジャ」という語がある。「ホジャ」の意味が、『NARUTO』に登場し主人公を育てる師匠の役割を通して説明されることで、マンガに親しみのある日本人読者は、スーフィズムにおける師弟関係を、『NARUTO』をはじめとしたマンガの師弟関係から感覚的に理解することができる。もちろん、当該のマンガを読んでいなければ分かりづらいという側面はあるし、師弟関係もかなり美化されたものであるかもしれない。それでもなお、トルコ人学生たちがマンガにスーフィズムの精神性を見出しているのであれば、若年層の日本人読者向けの説明にも援用できるはずである。本書で、複数のアニメのキャラクターが言及されているのも、こうした工夫の結果であろう。事実、宗教学を専攻している評者もまた、イスラームを説明する際、比較宗教学的な視座を用いながらイスラーム以外の宗教の説明を交えながら行うことが多い。それゆえ、筆者のこうした工夫に学ぶ点が多かった。

二つ目に、本書では生に不可欠な食事に焦点が当てられている。スーフィーらは食事でもまた修行の一環として捉えるため、作法が生じてくる。また、集団で修行生活を送るとき、食事に関する役割分担が生じてくる。筆者はメヴレヴィー教団における食事作法を紹介しつつ、禪宗における食事係である典座にも言及している。「なかでも修行者の食事を扱う料理職は修行者のなかでも最も高位の者が担う奉仕職であった。」(161頁)と述べられるように、食事の作法は食事の所作にとどまらず、食事を作る係や食器を洗う係など、食事の始まりから終わりまでのすべての過程におよぶ。また、現代トルコの「パン掛け」という現象についても説明されている。貧しい者が自由にパンを食べることができるようにパンを掛けるようであるが、これはスーフィズムにおける利他的伝統の表れである。筆者曰く、コロナ禍では「マスク掛け」、つまり貧しさなどの理由からマスクを購入することができない人々に新品のマスクを提供するという現象が見られたようである。

三つ目に、武術や武道など日本に暮らす人々にとって馴染みのあるトピックへの言及である。本書では、シラットと呼ばれる東南アジアの武術体系が取り上げられている。筆者が本書で幾度となく取り上げるナクシュバンディー教団は、精神修行のなかに武術を取り入れているという。スーフィズムでは吸息法(ブラーナ)を通して瞑想を行うが、それは「内なる呼吸」(ナファス・バーティン)へとつながる。スーフィズムに取り入れられた武術は、身を守る実用的な護身術として取り入れられたばかりでなく、武術経験者には馴染みがある型、さらに茶道の作法や食事の所作のように身体を通して心を磨くための方法として取り入れられた。日本文化を知る読者であれば、型や所作とはそれらの習得を通して精神的な深みを身体化するものでもあることに思いが至るであろう。さらに、習得には師の存在が不可欠である。筆者が説明で用いるアニメの主人公らは修行を通して強く成長していくわけだが、彼らが武術的技術を向上し、精神を鍛錬するうえで師の存在は不可欠であり、師弟関係なしに修行は成し得ない。スーフィズムと武術の説明においても、アニメの説明が補完的効果を生んでいる。

最終章である第十三章において、筆者はスーフィズムの修行論を通して、スーフィズムについて知ろうとする読者たちに対して、イスラームにおけるスーフィズムの位置付けを説明している。人間は不完全で弱い存在である。ムスリムも人間であり、「正しいイスラーム」を求めるあまり、自らを他より誇大に見せようとする者もいるだろう。しかしながら、筆者は、スーフィーの師たちによる自虐も踏まえた冗談話に言及しながら、スーフィズムの核心に迫ろうとする。筆者が考えるスーフィーの理想像とは、「より良いムスリム」を目指すなかで、自らの弱さをさらけ出しながらも、真理を得ようと修行を重ねる者である。それゆえ、修行における師の役割は、人間としての理想的な姿を見せることだけではなく、弟子が心をしなやかに保ちながら歩んでいけるように、時に自らの失敗を通して弟子の背中を優しく押すことでもある。

本書が新書サイズということもあり、筆者は時に説明を単純化してスーフィズムを説明した、否、しなければならなかった部分は確かにあるだろう。この点については、スーフィズム研究者としては不満も残る。しかしながら、筆者は美化され単純化して捉えられがちな師も一人の人間であることに言及し、さらにそれぞれ異なった状況にある人々に対して、自らを嘲りながら導いていこうとする「人間臭さ」に注目した。それによって、スーフィーを清貧な求道者として描き切ってしまうのではなく、理想と現実の交差する割り切

れない人生を懸命に生きる一人の人間として描こうとした。イスラームという宗教の精神性を代表してきたスーフィズムを、日本文化との接合点から新たに翻訳し、人生を葛藤しながら生きようとする人々の営みとして捉え直そうとする本書は、その今日的諸相を読み解くうえでの重要な示唆を与えてくれている。

(澤井 真 天理大学人文学部宗教学科准教授)

須永恵美子・熊倉和歌子(編)『イスラーム・デジタル人文学(U-PARL 協働型アジア研究叢書)』人文書院
2024年 272頁

技術進歩の恩恵を人文社会科学の研究に取り入れることで、学問の新たな地平を切り拓こうとする試みが、とくにコロナ禍を経て勢いづいている。そのひとつが、デジタル技術の諸成果を活用したデジタル人文学(英語圏ではデジタル・ヒューマニティーズと表記されることが多い)であり、これをイスラーム(地域)の研究に応用するかたちで書かれたのが本書である。デジタル人文学では、文字、画像、動画、音声など様々な素材からデータを抽出し、それを活用することで研究が進められる。データを用いた研究として一般的にイメージされるのは、従来では経済学や政治学などの社会科学の研究であった。しかし、最近では、それが文学や思想研究、歴史学などの分野にまで及ぶようになった。データといかに向き合うかが、これからの研究者にとって避けては通れない問題となっている。

本書は、デジタル人文学とは何か、またその手法を取り入れることで従来のイスラームに関する研究を、どのように変えることができるのかを、具体的手法の紹介を交えながら分かりやすくまとめた良書である。本書には社会科学の論考も含まれており、全体をデジタル人文学として括るのが適当かどうかは一考の余地がある。ただし、このことは、本書がデータの時代を迎える(あるいは既に迎えた)イスラーム(地域)研究のあり方を、分野の垣根を越えて広く描き出すことに成功していることの証でもある。とくに、これから研究を始めようとする初学者や、既に研究を始めてはいるが、新たな手法や方法論を知りたい研究者にとって、本書は「次世代型」の研究マニュアルとなるだろう。

本書に収められた論考とコラムは、どれも最新の研究動向に通じた若手・中堅の研究者により著されている。そのため、紹介されている手法やアーカイブなどは、研究を進めるうえで役立ちそうなものばかりで、いろいろと使ってみたい誘惑に駆られる。編者の須永恵美子氏と熊倉和歌子氏は、現地調査や一次資料を駆使した研究に定評があり、また他の執筆者もイスラーム(地域)研究の第一線で活躍する研究者である。そのため、本書はデータ利用のノウハウを単に説くだけでなく、データをよりよく活かした研究を行うために、データ以外のいかなる点が重要になるのかも教えてくれる。デジタル技術の何が、どのように従来のイスラーム(地域)研究を変えるのかを理解するうえで、さらには広くデジタル時代における人文社会科学の研究を考えるうえで、是非とも一読をおすすめしたい。

＊

本書は、全9章構成である。全体に関わる第1章や、イスラームの聖典と技術との史的展開を論じた第2章は、本書を通読する際には最初に目を通しておくのが望ましい。しかし、それ以外の章の内容は独立しているため、興味のある章から読み進めて構わないだろう。また、本書を実践的な研究マニュアルとして使う場合には、特定の章をピックアップして読むのも良い。各章の終わりにはコラムが付されている。どれも充実した内容で、コラムについても取り上げたいが、以下は章に限定して紹介する。

第1章「イスラーム・デジタル人文学とはじめ」(須永恵美子)は、本書全体を貫くテーマである「デジタル人文学」や、それをイスラーム(地域)研究に応用した「イスラーム・デジタル人文学」について説明している。欧米や日本でのデジタル人文学の展開、また用いられる手法や資料、さらに近年の図書館のデジタル化に向けた取り組みなどが簡潔にまとめられており、全体の内容を把握するのに役立つ。同章を読むことで、デジタル人文学の手法をイスラーム(地域)研究に取り入れることの利点や、期待される成果などを端的に知ることができる。

第2章「デジタル化される聖典——クルアーンとハディースの音と文字」(竹田敏之)は、本書に歴史的な